

炉辺夜話 什（じゅう）の掟

浅野 敏昭(余市水産博物館館長)

- 一、年長者(としうえのひと)の言ふことに背いてはなりません
 - 一、年長者にはお辞儀をしなければなりません
 - 一、嘘言(うそ)を言ふことはなりません
 - 一、卑怯な振舞をしてはなりません
 - 一、弱い者をいぢめてはなりません
 - 一、戸外で物を食べてはなりません
 - 一、戸外で婦人(おんな)と言葉を交へてはなりません
- ならぬことはならぬものです

これは什の掟というもので、「什」とは「同じ町に住む6歳から9歳までの藩士の子供たちが作った10人前後の集まりのことです。江戸時代の後半にできたと思われる什の掟は会津若松市内のさまざまな場面で見ることが出来ます。これをはじめて目にしたとき、自分にとって強烈なのは「ならぬものはならぬ」でした。

かの地の「会津っ子宣言」を読むと、
「やってはいけないこと・やらなければならないことの区別を持ち、自分勝手はやめ、社会生活のルールを守る強い心を持って、常に自分自身で考えて行動しましょう。」という意味の現代にあわせた宣言になっています。

戊辰戦争の最後の戦いとなった会津での戦いは会津戦争と呼ばれ、白虎隊の悲劇が有名です。その白虎隊を構成した若い藩士らも、この什の掟を学んだ人たちでした。かれらが通った日新館は、19世紀初めの会津藩主松平容頌(かたのぶ)公が設立し、儒学、国学、医学、兵学、武術、天文学などを教えた総合的な学校で、日新館の名称は中国の儒教の経典「大学」の中にある「日に新たに、日に新たに、又、日に新たなり」からとられたものでした。

明治4(1871)年、現在の黒川町と山田町に開墾の跡を下ろした旧会津藩士団は、子どもたちの教育のため、黒川村に建設された入植者用住宅の一軒を開放して日進館を設立しました。

開校後不足していた教科書についての古老の回想がのこされています。会津戦争に敗れ江戸での謹慎後、青森県に移って再興された斗南藩主松平家は余市日進館で教科書が不足していることを知って、それを案じ、会津藩家中にあった日新館で使われていた漢書を取り寄せて贈ってくれて、その不足がおぎなわれたのだそうです。

日進館は明治6年春に現在の開村記念碑の付近へ移転、黒川郷学所と改称しました。同年6月には開拓使浜中出張所の役人住宅が開放され、沢町方面にあった他の寺子屋と合併して余市仮郷学所となりました。両郷学所は開拓使の通達により教育所と名称を変更、黒川教育所は一時、浜中村の余市教育所に合併し後に再開しました。このふたつが後の沢町小学校、大川小学校、黒川小学校となったので、日進館は余市の学校教育の礎といえます。